

平成 22 年 12 月 6 日

音の日にあたって

社団法人 日本オーディオ協会
会長 校條 亮治

音の日とは

12月6日は「音の日」です。今から132年前、1877年12月6日はアメリカの生んだ発明王である「トーマス・エジソン」が蝋管に「音」を記録し、世紀の発明として認められた日として有名です。一度、発せられた「音」はそのままでは当然その時点で空間に消えてしまいますが蝋管に記録し、再生することで初めて「蓄音」という概念が確立されました。

日本オーディオ協会は15年前の法人化を機に賛同他団体の協賛を得てこの日を「音の日」と制定し、「音」、「音楽」などに関する啓発行事や事業を展開しています。今日では誰でも、どこでも、いつでも簡単に「音楽」を聴いたり、離れた人たちとコミュニケーションを簡単にとることが出来るようになりました。機械式から電気式へ、そしてアナログ技術からデジタル技術へとたゆまぬ進化を遂げています。これもエジソンの第一歩があったからといえます。

音楽文化の重要性と日本オーディオ協会の役割

エジソンが始めて蝋管に吹き込んだ第一声の「音」とは「ハロー」だったといわれています。第二声が改良機に向かって話した「メアリーちゃんの子羊」と呼び掛けたもので12月6日に「サイエンティフィック・アメリカン」の編集部を持ち込んでデモンストレーションされたものです。これは確実に記録され、かつ再生されました。エジソンは一年後の1878年に「蓄音機の使途」に対して10か条のメモを残しており、その4か条目に「音楽を記録、再生することが出来る」としています。

この時から「音」を記録し、再生することは音楽とは密接不可分な関係にあることをエジソンは見抜き、ビジネスとして大成することこそ文化の発展であることも示しています。それから技術は進化し、利便性を追求する「機能文化」のみならず、「感性価値文化」として世界にHIFIオーディオ＝再生音楽文化として大きく花開きました。しかし、技術進化は時として本来求められた価値や目的とは違うものをもたらすこともあります。特に私たち人間しか持ち得ない「感性価値文化」の代表たる「再生音楽文化」が「携帯音楽文化」にとって代われ、少しゆがめられてきたことは否めません。日本人の最も得意とする「感性価値」を今一度見直し、磨き上げるためにもオープンエアの自然体で再生音楽を聴く喜び、感動を掘り起こしていく必要があると考えています。恐らくエジソンもこのことについては大きくうなずいてくれるものと確信しています。私たちは貴重な「音」やクオリティーの高い「音楽音質」を継承することに日々努力をしているエンジニアや関係する人々に深い敬意を表し、毎年「音の匠」や「プロ録音賞」として顕彰・表彰をしています。さらに多くの賛同メーカーや販売店様のご協力により「音の日」前後に全国で試聴会を展開しています。

成熟文化の証である、心の豊かさを求めて

大量に資源を消費する物質中心文明こそ、先進国といわれてきましたが、行過ぎが地球上のあらゆるものを破壊に導く道であることも認識されだしました。限られた資源を有効に活用していくこと、循環サイクルで再生可能社会を創ることがいわれていますが、今年はさらにこの感を強く持った年ではないでしょうか。真の豊かさとは何か。心の豊かさとは何かが問われている今日です。私たちは「音楽」を聴くことによる心の感動が、人間生活に欠くことのできない営みであると確信しています。ある音響メーカーの創業者は「いい音で音楽を聴くことが世界平和につながる」とまでいって起業しています。戦争映画の一場面でも音楽がひと時の休戦をもたらすシーンがありました。心の豊かさを醸成する「音楽を聴く」文化、とりわけHIFIオーディオ文化こそ心の豊かさの座標軸であるとの信念を持って次世代に継承したいものです。